第８課　ペテロの書簡の中のイエス

【暗唱聖句】

「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」第一ペテロ2:24

キリストの十字架の贖いを信じるとき、わたしたちには驚くべきことが起こります。それは罪に死に、義によって生きるものとなることです。罪によって死ぬべきだったものが、キリストによって永遠に生きるものとなったということです。ペテロは、それは癒される経験であるとも言い換えています。すべての人はイエス様が与えてくださる癒しの経験が必要です。重荷を負う者、渇きを覚える者、希望のない者、傷ついている者、不安の中に取り残されている者、すべての者を主は癒してくださいます。十字架の主を見上げていくとき、そんな不思議なことが起こります。

【今週のテーマ】

ペテロの手紙の中心テーマはイエス・キリストです。今週はイエス様の犠牲について学びます。

【日曜日　イエス―私たちの犠牲】

聖書の中の重要なテーマの一つである人類救済における神様の働きについてペテロの手紙の中にも語られています。

「知ってのとおり、あなたがたが…贖われたのは金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない子羊のようなキリストの尊い血によるのです」第一ペテロ1:18，19

神様の救済の働きで鍵となる言葉は、「贖い」と「子羊（動物の犠牲）」です。「贖い」とは買い戻すことを意味しています。当時奴隷でさえ贖われたなら自由となりました。これは罪によって堕落しサタンの支配下にいる人類を、神様は代価を支払って買い戻し、人類を救済されことを意味しています。その際に支払われた代価は、金や銀ではなく、きずや汚れのない子羊でした。

「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです」コロサイ1:13，14

旧約時代に犠牲制度のもとで、罪が許されるために子羊が捧げられましたが、その子羊はイエス・キリストを象徴していました。イエス様はご自身を象徴する動物として最も弱く、従順な子羊を選ばれました。全能なる神様がそこまで自分を低くしてくださることによって、神様の愛と品性を表してくださいました。

【月曜日　キリストの受難】

ペテロはイザヤ書53章を引用して、キリストの受難について語っています。

「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました」第一ペテロ2:22、23

ペテロから見たイエス・キリストは罪をまったく犯したことがない方だったということ、その言葉はいつも真実で偽りがなかったということ、ののしられても黙っておられ、決してののしり返したり、脅したりすることがないお姿でした。それはペテロから見て不思議な思うほどだったことでしょう。しかし、それはイエス様がすべてを正しくお裁きになる父なるお任せしておられたからでした。これはまさにわたしたちの模範です。だから、ペテロは次のように語っているのです。

「あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです」第一ペテロ2:21

そしてさらに続けます。

「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。」第一ペテロ2:24、25

イエス様が苦しまれたのは、実はわたしたちのためだったのだとペテロは語ります。もしイエス様が文句を言い、この苦しみを避けたならば、わたしたちの救いの望みは消えてしまうのでした。実際、イエス様を信じたとき、わたしたちは癒され、さ迷いの人生から確かな人生へと変えられ、魂は安らぎを得たのでした。

【火曜日　イエスの復活】

ペテロの手紙は信仰のゆえに苦しんでいる人たちに向けて書かれてあるので冒頭から希望について語っています。そして、その希望とは、キリストの復活に由来するものでした。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました」第一ペテロ1:3、4

キリストの復活がなぜ希望になるのか、それはわたしたちも同じく復活し、朽ちず、汚れず、しぼまない財産すなわち永遠の命を受けることができるようになるからです。パウロもこの希望がなければ、わたしたちの信仰は空しく、わたしたちは今なお罪の中にいることになると言っています。エレン・G・ホワイトは次のように言っています。

「クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、「キリストが現れるときには、あなたがたもキリストと共に栄光のうちに現れるであろう」。再臨の時にはすべての死せる尊い人々がキリストの声を聞いて、輝かしい永遠の生命に入るのである」（各時代の希望P318，319）

【水曜日　メシアとしてのイエス】

ペテロの信仰の大きな転換点となったことの1つは、私を何者と言うのかと問われたとき、「あなたこそメシア、生ける神の子です」と答えたときでした。メシアとは油注がれた者という意味の言葉で、広い意味では旧約聖書に基づく理想的な人物を指していましたが、より具体的な意味ではそれは王を、ローマからユダヤ人たちを解放してくれる王を暗示していました。しかし、メシアなるキリストはローマ人の手によって十字架にかけられてしまいます。これはペテロをはじめ弟子たちは誰一人として想像すらしていなかったことでしょう。だから、ペテロは「あなたこそメシアです」と告白しましたが、その自分が言っている言葉が意味することを、本当は正しく理解していたわけではなかったのです。ただ、イエス様は誰なのかと興奮する群衆たちと、古くから伝え聞いてきたメシア思想が錯綜するなかで、イエス様から急に、「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と尋ねられたので、びっくりして、その興奮状態に触発されて、「あなたこそメシア、生ける神の子です」と答えたのだろうと思われます。しかし、このようにペテロが答えたにも関わらず、イエス様はペテロに、それは父なる神様が語らせたのだと言われたのでした。この手紙を書いているとき、ペテロはこのような一連のやり取りを思い出していたかもしれません。いまは、はっきりと彼は理解しています。メシアとはどなたで、どのような方法で、何を成し遂げてくださったのかを。

【木曜日　神なるメシア】

ペテロは、この手紙の中でイエス様を「わたしたちの主イエス・キリスト」（第一ペテロ1:3、第二ペテロ1:8）と「主」と呼んでいます。ここで言う主とは神性を意味しています。そして、「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように」（第一ペテロ1:3）とあるように、イエス様と神様と父と子という関係であり、ゆえにイエス様に与えられている権威や天での地位を理解しています。

また、「…わたしたちの神と救い主イエス・キリストの義によって…」（第二ペテロ1:1）という言葉は、同じ定冠詞が神と救い主との両方に使われているため、救い主なるイエス・キリストの神性をはっきり表す聖句の一つと言われています。

初代教会では長い時間をかけながら、イエス様は真に神様であったということを理解していき、それを可能な限りうまく説明するために三位一体という教理を生み出しました。